
幻聴

曇犬

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻聴

【Nコード】

N5123Z

【作者名】

曇犬

【あらすじ】

沖田総悟がいなくなり、神楽は彷徨い歩いていた。
そんなある日、声が聞こえる。

この声はいつもの幻聴？それとも…

沖田総悟が、消えた。

大きな仕事があるからしばらく会えない。それだけ言っ

——『ほら、かかってこいやアホチャイナ』

二人でにふざけた、あの公園。

——『幸せそうな顔してんなア』

二人で笑った、あの甘味屋。

——『しゃあねーな。酢昆布買ってやらア』

いっしょに歩いた、普通の道。

どこに行っても、違う事を考えても、アイツの声を思い出す。

アイツが遠征に行って一年が経ったのに、どうしても彼の事が忘れられなかった。

遠征に行ったが大怪我をし、半年ほど前に歌舞伎町に帰ってきたトッシーに聞いても「俺も解らない」って言われた。なんで部下のことなのに解らないんだって文句を言おうとしたけれど、出来なかった。

彼の瞳は悲しそうで、傷ついた眼をしていたから。

だから私は今日も一人で、歌舞伎町をさ迷い歩く。今日帰ってくるかもしれない。そんな淡い期待を胸に抱いて。

「銀ちゃん、散歩してくるネ」

「ああ、門限守れよ」

結わかずに垂らした髪をひるがえし、ガラガラッと扉を開けた。
しばらく歩くと、いつもどおりアイツの声が聞こえた。

しかし本人が私に話しかけているわけもなく、何十回も聞いたことのある幻聴だ。

所詮、昔の記憶を掘り出したものに過ぎない。

「サドのくせに生意気ヨ。私の記憶にいつまでも住み着きやがって」

…なんてね。

本当は私怖いんだ。

いつかアイツの声を忘れてしまっくんじゃないかって。
だから声が聞こえる度に、少しだけ安心する。

「お前はとっくに、私のことなんて忘れてんだロ？自分勝手な奴アル…」

私がどれだけ探し回っていると思ってるんだ。
何回お前の名前を、呼んだと思ってるんだ。

「泣くのは勘弁してくれイ。たまには胸くらい貸してやるから」

昔、私が泣いてしまった時にそう言ったのはどのどいつだ。――
…嘘つき。

私はね、まだ言いたいこといっぱいあるんだよ？たくさんたくさん、数え切れないほどあるんだよ？

なのにお前は勝手にいなくなりやがって。何様のつもりだ。

「一発殴らせるコノヤロオオー！」

冷たい雫が、ぽたりと落ちた。

人の視線を感じたがもうどうでもいい。

地面にしゃがみ、唇を噛む。

「早く…帰ってこいヨ」

お願いだから、帰ってきて。

生憎そんな可愛いことは言えないから、命令口調になってしまっ

「じゃないとお前のことなんて、本当に忘れちゃうからナ！」

『…そりゃ困りまさら』

「だってお前が帰って来ないからいけないんだバカ！」

幻聴のくせに刃向かってくるな。

本当に話しかけられたようにそっくりだから、余計惨めになる。

「おうおう、そんなに会いたかったかい。可愛いところあるじゃねえかクソアマ」

……いやちよつと待て。

今まで幻聴って、こんなにハッキリしてたっけ？

というかこんな言葉、今まで聞いたことあったっけ？

幻聴って記憶を再生してるにすぎないハズなんだけど…。

意味が解らない私は下を向いたまま、質問を試みることにした。

「今の私の髪型はなんでしょう？」

「ん？そっぴや団子じゃねエ。イメチェンかい？」

この言葉で、私の頭は真っ白になった。心臓もいつもより早く、ドクドクと脈打っている。

私はサドの前で髪をおろしたことがない。つまり……「団子じゃねえ」なんて言われたことがない。

一度深呼吸をしてから、意を決してバツと上を向いた。

「……沖、田そーご」

そこにいたのは栗色のサラサラ髪的青年で、記憶のアイツより少しだけ大人びて見えた。

でも確かにこの男は、私が一年待った相手だ。この綺麗な赤い瞳は間違いない。

「久しぶりだなチャイナ。元気だったかい？」

——帰って、来た……？

「…ホアチャアアアッ！」

「ってうおおっ！？なんだよ感動の再会だったのに殴りかかってくんなん！屯所より早くおめえを探してやったのに…さすがゴリラは一年経ってもゴリラでさア」

気づいたらサドに飛びかかり、馬乗り状態になっていた。
そして再び、涙が頬を流れる。

「馬鹿アル！なんでもっと早く帰ってこなかったんだヨ！」

「無茶言っな、これが仕事なんだよボケ」

一年経っても、喧嘩は前と同じ調子で繰り広げられる。
でも私はこんな野郎とは違って大人になった。だから今こそその成長を見せてやろう。

意地を張らずに「素直」を出すんだ。

「……お、お」

「お？」

「お…か、」

「なんでロボット化してんだよ」

「お、おおおおかえりなさいネはげえええ！」

完成度は別として、やっと言えた。

サドをチラリと見ると、ポカンと目を丸くしている。それから意地悪く口角を上げた。

私の頭に暖かい手が置かれる。

「ただいま、神楽」

この日をずっと待っていた。

逢いたくて、逢いたくて、仕方がなかった。

やっと帰って来てくれたね。

やっと触れてくれたね。

これはもう…、夢でも幻聴でもないんだよね。

これでやっと…心から笑えるよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5123z/>

幻聴

2011年12月17日12時56分発行